

# グーグルのスマート・クリエイティブと今西錦司。

『How Google Works 私たちの働き方とマネジメント』 エリック・シュミット他

『生物の世界』 今西錦司

1998年、スタンフォード大学の博士課程に在籍していたラリー・ページとセルゲイ・ブリンは、家族や友人からかき集めた100万円でグーグルを立ち上げました。その後、同社は「検索エンジン」「アドワーズ広告」「ネットサービス」等の分野で驚異的な成長を遂げ、2012年には年間売上高6兆円を突破。現在では40カ国以上で4



5000人を超える従業員を要する巨大企業に変貌しました。グーグルの成長に寄り添うように、私たちは高度なツールやアプリにアクセスしながら「インターネットの世紀」を生きています。テクノロジーの進展は、私たちのライフスタイルに様々な利便性をもたらしましたが、一方で、産業界の競争条件を根本から変えてしまいました。これまでは、圧倒的な「マーケティング力」や「販売力」があれば少々お粗末なプロダクトでも市場の勝者になることができましたが、消費者がかつてないほど多くの情報と選択肢を手にした今、企業の成功に最も重要な要素は「プロダクトの優位性」だと言われています（プロダクトとは、生産品、商品だけでなく無形のサービスを含む）。つまり、既存のモノやサービスを如何にして売るかに注力するのではなく、消費者の利益を最優先し、スピード感をもって改良に改良を重ね、その優位性を維持し続けなくてはならないということです。

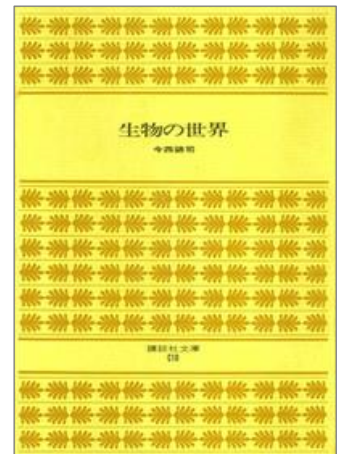
グーグル現会長で前CEOのエリック・シュミットは、著書『How Google Works 私たちの働き方とマネジメント』（日本経済新聞出版社）の中で、プロダクトの優位性を保つために必要なのは「多面的な能力を持つ新種の従業員“スマート・クリエイティブ”を惹きつけ、彼らが大きな目標を達成できるような環境を与えることだ」と語ります。

ここでいうスマート・クリエイティブとは、実行力に優れ、単にコンセプトを考えるだけでなくプロトタイプをつくる人。リスクをいとわず、あるいは途方もない自信家で、納得できない指示は無視し、自らの主体性にもとづいて行動する。あらゆる可能性にオープンで、コミュニケーションは得意。自由に他者と協力し、誰のアイデアや分析かではなく、それ自体の質にもとづいて評価のできる人材です。従来型の企業経営では、このような人材はすぐに問題児扱いされ、お払い箱にされてしまうかもしれません…(笑)。しかしグーグルは、このような人材が毎日喜んで入社したくなるような環境をつくることこそ、企業の成長には欠かせないと本気で考えているようです。

グーグルの革新的で自由な経営スタイルの象徴の一つに「20%

ルール」があります。社員が勤務時間の20%を自分が担当している業務以外のどんなことにも使うことができるルールで、実際に「Gmail」や「グーグル・ニュース」といったプロダクトがここから生まれたのは有名な話です。本書のタイトルどおり、グーグルのスマート・クリエイティブたちがどんなふうに関わり、どれほど驚異的なスピードで成果を上げてきたか。その方法論は読んでおいて損はありません。

さて、日本におけるスマート・クリエイティブについて想像を膨らませると、ふと生物学者・今西錦司のことを思い出しました。彼が世界に知らしめた途方もないインパクトを皆さんはご存知でしょうか。日本がまだ戦争に明け暮れる1940年、38歳の彼が脱稿した『生物の世界』（講談社）。書き出しは次のように始まります。



「この小著を、私は科学論文あるいは科学書のつもりで書いたのではない。それはそこから私の科学論文が生まれ出ずべき源泉であり、その意味でそれは私自身であり、私の自画像である。（中省略）私の命がもしこれまでのものだとしたら、私はせめてこの国の一隅に、こんな生物学者も存在していたということ、なにかの形で残したいと願った」。日中戦争は拡大し、予備工兵少尉としての今西にいつ召集の命がきてもおかしくない中で、本書はまさに遺書として記されました。その中で今西は、今もなお「正当な進化論」と位置づけられる生物学の大前提『ダーウィンの進化論』に、たった一人、学者生命を賭け真っ向から反論を試みます。今西の強靱な思索力（クリエイティビティ）の上にくみあげられた思想や、全編に貫流する緊張感と創造性を備えた理論はここでは割愛しますが、本書からほとぼる今西の“人となり”は、語弊を恐れずに言えば、グーグルが現代に与えたインパクトに劣らぬ気宇壮大さを感じます。

最後に、今西が82歳になって寄稿したある論文の一節を紹介しておきたいと思います。

「動物や植物の自然のままな姿など一度も見たことのない高名な学者もいることだろう。そんな人たちのもっている自然観と、生涯をフィールド（自然）の中でくらしてきた私のようなものの自然観とが、いっしょにされてたまるか、という気持ちはいまでも、“底流”かどうかしらぬが、どこかにくすぶっている（以下省略）」

(2014/12/25 コンサルティング部 K.H)